対する指導の手立てについてや、生活の中の素材を授業にいかに活かしていくのかについて話し合い、本時の授業づくりの参考にした。

本時は、視力とランドルト環の関係を基に、視力と測定の距離の関係を考察し、比例の関係にあることに気づかせ、グラフや式で表す場面である。授業の中では実際に、教室内や廊下で視力測定を行うなど、興味を引きつける活動を取り入れることにより、全員が参加できる授業づくりを目指した。

図４－４－７　机間指導

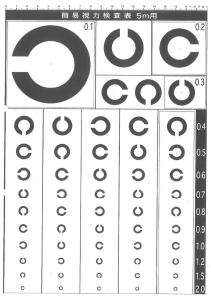

図４－４－８　ランドルト環

⑺　本時で取り入れた「ＵＤの視点」による手立て

ａ　板書とワークシートの対応（ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」項目③より）

板書と生徒に配付したワークシートが対応しており生徒がワークシートに記入しやすい配慮がなされた。生徒は、ワークシートの使い方に慣れており、課題を書き込む場面や、グラフの作成の場面では、素早く課題に取り組む姿が見られた。ワークシートの右下には、本時の目標に対する自己評価を記入する欄があった。短時間で記入できるよう配慮されており、単元を通して自分の振り返りにも活用できるようにした。

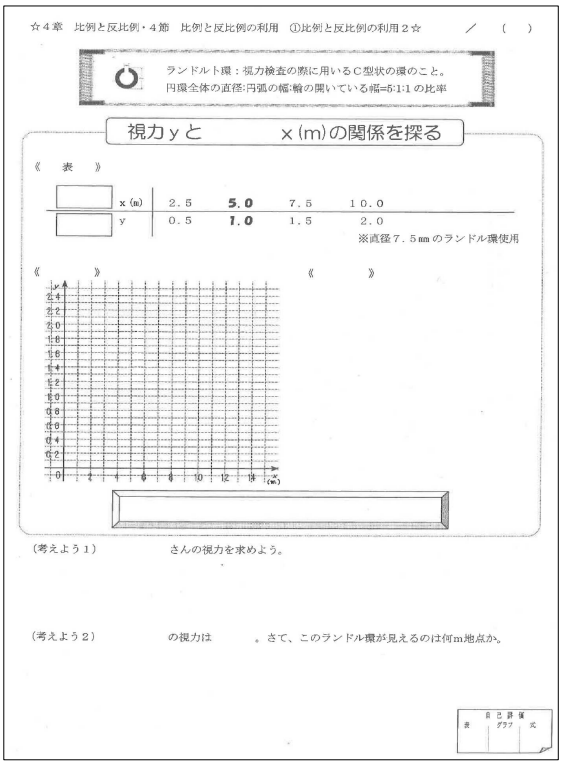

図４－４－９　板書に対応したワークシート

ｂ　ランドルト環を活用した授業の展開（ＵＤの視点Ⅶ「教材・ 教具」項目①より）

授業の導入時、視力検査で使用するランドルト環を提示した。生徒を指名し、ランドルト環の見える距離を測る活動を取り入れ、本時の課題へとつなげた。生活の中からの素材を活用した課題設定を行ったことにより、生徒は課題を自分のものとして捉え学習を進めることができた。求めた比例の式を基にして実際に自分の視力を測る活動を取り入れたことにより、学習したことが生活に役立つことを実感できたようである。

また、マサイ族の平均視力７．０を示し、視力表のランドルト環の見える距離を計算により求め、廊下に出てその距離を生徒に体感させることにより、学習への関心を一層高めることができた。

③　ＵＤの視点を取り入れた授業実践の成果

ア　授業研究の進め方について

大石田中学校の研究テーマ「わかる、できる喜びを味わえる、魅力ある授業の創造」を基に、目指す生徒像を追究していくために、よりよい授業づくりに取り組んできた。授業者は、ＵＤの視点を取り入れることは大石田中学校で考える授業づくりのイメージと別のものではなく、授業者は共通する部分が多くあることに実践を通して気づいた。授業公開シートを使い、互いに時間を見つけて集まり、気軽に授業についての打合せができるようにしてきた。そして、校内の先生方にもこのような方法で研究・研修の取組みができることを伝え、広めていきたいと考えていた。

イ　教員の感想や意見

図４－４－１０　授業後の話し合い

・７つの視点のどの項目に取り組むかを最初に考えるのではなく、本時のねらいを達成するため、７つの視点をどのように取り入れるかを考えることが大切であることに気づいた。

・ＵＤの視点を意識することで、配慮を要する生徒をはじめとして、具体的な生徒の姿を基に話し合いを進めることができた。一人一人の授業の中での姿を語り合うことが、「わかる、できる喜びを味わえる授業」につながると感じた。

・７つの視点一覧表を見て、「こうすればよかったのか」という点に気づいたところがあった。また一方で、日常からすでにやっていることもあった。ＵＤの視点で授業を見つめ直すことは、数学という教科の枠を越えて他の教科の先生方との話し合いにも発展させることができると思う。

・それぞれの教科によって、学習のきまり等がばらばらだと生徒にとっては戸惑うところが多くなることに気づいた。教科担任は学校や学年のきまりを踏まえた上で指導することが大切であることを感じた。

ＵＤの視点に沿って授業を振り返ることにより、一人一人の生徒に焦点をあて、みんなに「わかる、できる喜び」を味わわせるためには、どうしたらよいか、普段から熱心な話し合いが行われている。その手立てや思いが確実に生徒に伝わっていることを、授業を参観して実感した。

中学校における教科部会での取組みは、貴重な実践であり、今後もぜひ継続して取り組んでいただきたいと願うとともに、このような取組みが広がることを期待したい。

(4)　初任者研修で取り組んだＵＤの授業づくり　～山形県立山辺高等学校～

①　授業づくりの特色

山辺高校では、初任者研修・経験者研修対象教員に求められる授業づくりの基礎・基本としての指導力の向上をねらうことを目的にして、ＵＤの視点を取り入れた授業実践に取り組んだ。他の教員については、教科の壁を越えた感想・意見の交流・校内研究の活性化をねらいとした。また、「ＵＤの視点による手立て」を、「学級の中で、配慮を要する生徒にとっては『なくてはならない支援（第１次支援)』であり、同時に、すべての生徒にとって『有効な支援』である」と捉え、特別支援教育の推進と併せ、通常の学級における授業の質の向上を目指した。

はじめに、「ＵＤの視点を取り入れた授業づくり」について、共通理解を図るための校内研修会を行った。この研修会において、高等学校においても「ＵＤの視点による手立て」が有効であり、「配慮を要する生徒」だけでなく、「すべての生徒」の双方にとって「わかる、できる」授業づくりが求められていることを確認した。また、ＵＤの視点を取り入れた授業公開シートの紹介や、ＫＪ法によるワークショップ型事前・事後研修会の模擬演習を通じて、その方法と効果についても実感することができた。

その後に行った授業の中で、生徒の実態から授業を組み立て、指導案にＵＤの視点を取り入れた工夫を明示し、事後研では、授業公開シートを活用したワークショップ型の話し合いを行った。

以下に、実際に行った「福祉科」と「看護科」の授業について紹介する。なお、この２つの授業を行った授業者はともに今年度の初任者であり、初任者研修における研究授業で取り組んだ実践である。

②　授業の実際

ア　２年生（福祉科）コミュニケーション技術の授業　～単元名　介護場面における利用者・家族とのコミュニケーション　話を聴く技法～

⑺　本時で取り入れた「ＵＤの視点」による手立て

ａ　学習の見通しの明確化（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」①より）

目標や時間配分などを提示することで、見通しを持たせ、グループの話し合いを進めていた。

あらかじめ移動黒板に、グループ分けや手順がわかりやすく書かれており、生徒が見通しを持って、最後まで予定された学習活動に取り組んでいた。また、導入、課題設定から評価までの流れについて、言葉だけでなく視覚的にも示し、生徒が何について考えればいいかをわかりやすくした。

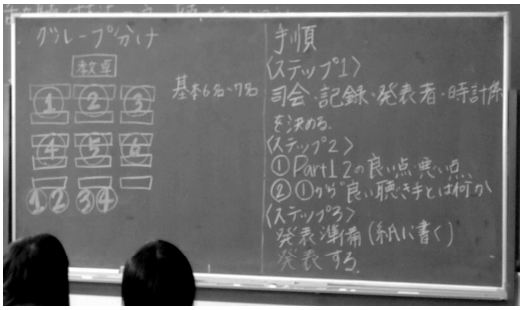

図４－５－１　学習の流れの見通し

ｂ　視覚的な資料提示の工夫（ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」①より）

ＤＶＤの視聴など、視覚に訴える教材を工夫した。

導入においては、「きく」と書かれた画用紙を提示することにより、生徒の注意を引きつけ、本時のねらいに集中させることができた。また、板書の文字もとても大きく読みやすく書かれていた。

大型テレビを使用したことにより、ＤＶＤを見やすく視聴することができた。ＤＶＤは、自校教員が演じた自作のものであり、ストーリー設定や台詞の吟味や役づくりなどの演出の工夫がなされた。このことにより、生徒に「考えさせたい」、「捉えさせたい」と教師が意図した内容を的確に提示することができた。

図４－５－２
視覚的な提示

ｃ　グループごとの学習活動の工夫（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」⑥より）

グループごとの学習活動で、話し合いをさせ、気づきや考えを深めさせた。

授業の最後に、すべてのグループが画用紙に話し合ったことをまとめ、その成果物を黒板に掲示して発表するなど、主体的に学ばせることで、生徒の学習意欲や目的意識を喚起させた。

また、グループワークで画用紙に記入し分担して発表することにより、自分たちの考えを深めることにつながり、成就感を味わえていた。

調べ活動、話し合い活動、発表などさまざまな学習活動をすることにより、生徒たちが活発に授業に取り組むことができた。

図４－５－３　成就感につながったグループ発表

ｄ　ワークシートの工夫（ＵＤの視点Ⅶ「教材・教具」③より）

１枚のワークシートにＤＶＤ視聴を通して観察したことを記述する欄と「良い聴き手の条件」について記入する欄を設けることで、学習内容をまとめやすく工夫した。また、板書とワークシートが学習の流れに沿ってリンクしており、生徒が無理なく書けるようなレイアウトの工夫がされた。

ｅ　個別の声がけ・確認（ＵＤの視点Ⅴ「教師の話し方、発問や指示」②より）

個人作業の際に戸惑いが生じている生徒には、机間指導を行いヒントを与えた。グループワークの際に自己表現が苦手な生徒がいる場合には、声がけ等を行いながらサポートした。

こまめにグループを回り、それぞれの生徒に応じた声がけをした。また、個々の生徒の状況や生徒同士の関係にも考慮しながらかかわった。言葉の一つ一つを丁寧に選んで話すことで、生徒がより理解を深めることにつながった。

イ　３年生（看護科）看護の授業　～単元名　母子看護（女性のライフステージ各期の健康と看護）～

⑺　本時で取り入れた「ＵＤの視点」による手立て

ａ　学習の流れの見通しの明確化（ＵＤの視点Ⅳ「授業の構成」①より）

学習予定表を明示することによって、本時の学習内容の全体的なイメージを捉えることができるように工夫した。

また、移動黒板を使って目標や授業の流れ、時間配分を提示することにより、生徒に学習活動の見通しを持たせよ

図４－５－４
時間配分の提示